「十湖賞」と「浜松市東区俳句の里づくり事業」

江戸時代末期、松島十湖翁は、現在の浜松市東区豊西町に生まれ、俳人にして政治家、さらには地域貢献に務めた篤志家です。生涯に詠んだ句は七千句とも言われ、全国各地に多くの門人がいました。

十湖翁の俳句は、松尾芭蕉からの蕉風を継承すべく、花鳥風月といわれる春夏秋冬・四季折々の自然、その中での生活を詠む伝統的なものです。

「はま松は出世城なり初松魚」は、「出世の街・浜松」を象徴した、浜松を誇る気持ちを詠んだ句です。

東区では、こうした十湖翁の遺徳を称えるとともに、「郷土を愛する心」を今に伝えるべく「十湖賞」俳句大会を開催しています。

元来、東区内には多くの句碑群があり、多くの俳人も輩出していることから、「俳句の里」としての側面を垣間見ることができます。

浜松市東区及び実行委員会では、このような背景のもと、「浜松市東区俳句の里づくり事業」を行っています。

第十四回「十湖賞」俳句大会入選句集

令和四年二月十一日（金・祝）
於　浜松市総合産業展示館 北館1号ホール

目次

ごあいさつ……2・3
十湖大賞……4
十湖賞……5
東区長賞
県教育長賞……6
市教育長賞
特選……7
佳作……8・9
奨励賞……10～13

選者

天野　薫氏（「みづうみ」編集長）
髙柳克弘氏（「鷹」編集長）
村松二本氏（「椎」主宰）
百合山真苗氏（「海坂」編集長）

※五十音順

第十四回「十湖賞」俳句大会投句実績

一般の部		高校生の部		中学生の部		小学生の部		全　体	
人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数	人数	投句数
534	1,041	1,570	2,858	2,480	4,164	1,649	2,775	6,233	10,838

一般の部・地域別	
地域	投句数
市内	418
県内（浜松市外）	146
県外	477
合計	1,041

※募集期間：令和３年7月1日（木）～令和３年9月30日（木）

ごあいさつ

浜松市東区俳句の里づくり事業実行委員会
委員長　松島 知次

第十四回「十湖賞」俳句大会は、全体で六、二三三人、一万八三八句もの投句をいただきました。今回は海外の小学校からの投句もあり、「十湖賞」俳句大会が広く皆様に知っていただいていることを喜ばしく思っております。

前年度と同様、新型コロナウイルス感染症の影響により、行動が制限され、もどかしい日々を過ごした方も多くいらっしゃるのではないでしょうか。しかし、その中でも、日常生活や身近な自然の中での思いや発見を題材として素晴らしい句を詠んでいただきました。

浜松市東区俳句の里づくり事業実行委員会では、これからも俳句を通じ、郷土を愛する気持ちを育むとともに、俳句文化の振興に尽力してまいります。

終わりに、入選された皆様に心よりお祝い申し上げるとともに、選者の皆様、並びに事業推進に係りご尽力いただきました関係者の皆様へ厚くお礼を申し上げます。皆様方の今後ますますのご活躍、ご多幸をお祈り申し上げまして挨拶とさせていただきます。

浜松市東区長　藤田 晴康

浜松市東区は、明治・大正期に活躍した俳人・松島十湖の出身地であり、古くから俳句に縁のある地域です。そこで、その地域性を活かし、平成十九年度から「俳句の里づくり事業」を行っています。この事業では、十湖の名前を冠した「十湖賞」俳句大会や区内の小中高校生を対象に、俳句を身近に感じてもらおうと「小中高校俳句講座」を実施してまいりました。

今回は、前回と同様、新型コロナウイルス感染症の影響が懸念される中ではありましたが、十四回目を迎える「十湖賞」俳句大会を無事に開催できたことを大変嬉しく思っております。

今後も、地域の大切な財産として俳句大会を盛り上げると同時に、皆さまに郷土を愛する心を育んでいただけるよう創意工夫を重ね、本事業に取り組んでまいります。

結びにあたり、大会に投句いただいた皆様、選考していただいた選者の皆様、そして本事業に携わっていただいた全ての皆様に深く感謝を申し上げ、挨拶とさせていただきます。

十湖大賞・十湖賞〈中学生の部〉

夏の風吹くたび山が呼吸する

与進中学校三年　鈴木 皓陽

評：風に吹かれる新緑の山々が「呼吸する」と表現した。「吹くたび」とあるから「呼吸」を繰り返しているのだろう。恐らく作者は木々の動きを「呼吸」に例えてるのではなく、本当に「山が呼吸」していると理屈を超えて感じたのだろう。その感覚が素晴らしい。（村松二本）

十湖賞

〈一般の部〉

沢蟹のからりとあがる同窓会

浜松市中区　根本 剛宏

評：全国展開している大資本の居酒屋ではないでしょう。川で獲ってきた沢蟹を調理して出す、郊外の居酒屋を想像しました。そこでの同窓会では、ふるさとの自然の素晴らしさも語られたに違いありません。「からり」に芯から寛いだその場の雰囲気が思われます。（髙柳克弘）

〈高校生の部〉

背泳ぎや塩素の香る白い雲

浜名高校二年　遠山 琴々乃

評：プール掃除を終え初めての水泳。水が澄み塩素の香りが残っている。背泳ぎをしていると夏らしい青い空には白い雲が。上五の切字「や」を用いたこと・中七の個性的な表現が良い。学校生活に句材を見付け情景豊かに、想いを詠った高校生らしい感性豊かな句。（天野薫）

〈小学生の部〉

一点差入道雲を見上げたよ

和田小学校六年　鈴木 彩隼

評：少年野球の接戦の場面を想像した。入道雲が視界に入ったとすれば、ホームランを許してしまったのであろう。一点差に悔しさが滲む。落胆の後、即気持ちを立て直したことが入道雲の力強さから窺える。（百合山真苗）

東区長賞

＜一般の部＞　みづうみのひと駅づつの大夕焼　浜松市中区　鈴木 利江

評：天竜浜名湖鉄道沿線の景が浮かんでくる。小さな駅に停車する度、茜色の空が広がってゆき、またその色が濃くなってゆく。やがて夕焼けは色を失うことになる。作者はそれを知ったうえで、今この瞬間の夕空を惜しんでいるのではないだろうか。（村松二本）

県教育長賞

＜高校生の部＞　月光や十五の僕を映し出す　浜松東高校三年　山田 玲音

評：武家時代であれば元服を経て成人になる年齢である。現代の十五歳にも志が芽生える時期。現在と将来、胸の内をすべて知っているかの様な月光がナイーブな少年の姿を浮かび上がらせる。繊細な作品である。（百合山真苗）

市教育長賞

＜中学生の部＞　スイカ割り力強くて地球割れ　笠井中学校三年　坂口 貴志

評：思いっきり棒をふりおろしたら、力余って地球まで割れてしまったというのです。ギャグマンガのような誇張されたイメージで、愉快ですね。俳句とは侘び寂びであるというような固定観念にとらわれず、のびのびと詠んでいることに好感を持ちました。（高柳克弘）

＜小学生の部＞　かがやいて「入っておいで」と夏の山　中ノ町小学校五年　鈴木 雷

評：上五「夏の山」の新緑の頃の情景を「かがやいて」と表した。中七「入っておいで」山が私を迎えてくれているという作者の想い・今から行くよと勇んでいる姿がみえる。かぎかっこを用いたことが成功。山も作者も生き生きとし活気に溢れ、木々の香・山の香に心動かされる。（天野薫）

特選

＜一般の部＞

父と土拓きし稲田子が刈りぬ　千葉県香取市　坂本 正夫

秋風を猟犬すでに嗅ぎ分くる　大分県国東市　木村 弘治

＜高校生の部＞

高校生少しの背伸びサングラス　浜松東高校一年　都築 歩磨

胸いっぱい新しい空気初桜　浜北西高校三年　水野 壮太

＜中学生の部＞

母のシチュー冬の寒さに勝りけり　笠井中学校三年　太田 沙和

雲海を割って飛び出すスカイツリー　与進中学校三年　水野 蓮都

＜小学生の部＞

下校中日かげでうとうと一休み　与進北小学校六年　袴田 柚月

あかとんぼそらをひゅーととんでゆく　豊西小学校二年　長谷川 輝

佳作

〈一般の部〉

古書のルビ誰がふりしか夜学校
富士市　佐野 明美

母の弾く暮春のヤマハピアノかな
兵庫県神戸市　木内 美恵子

還暦の春やマキタのチェンソーと
浜松市天竜区　大須賀 計博

春愁やゆつくり剥がす絆創膏
東京都練馬区　伊勢 史朗

真つ直ぐに疫禍の街を白日傘
愛知県名古屋市　山内 基成

いくたびも掌にあたためて雛流す
神奈川県横浜市　多田 学友

〈中学生の部〉

更衣いつもと違う立ち姿
笠井中学校二年　石野 桃子

こだまするまきをわる音鶴が飛ぶ
東陽中学校一年　土屋 祐太

写メールで赤いほおずき自慢され
東陽中学校二年　佐藤 美晴

凍星も驚く君の瞳かな
与進中学校三年　赤堀 来斗

シャボン玉僕を残して消えていく
東陽中学校一年　竹田 蒼空

年越しは見えない線を大ジャンプ
与進中学校三年　西村 美咲

〈高校生の部〉

砂浜で父を親父と呼んで夏
浜松修学舎高校一年　戸館 縁

七夕に亡き祖父想う祖母の顔
浜北西高校二年　大橋 彩心

母の日にやってしまった大喧嘩
浜北西高校二年　古田 凱

クローバー大きく見える小さな手
浜北西高校二年　内田 有咲

春風やお菓子屋までを六百歩
島田樟誠高校一年　メール エイス

原爆忌溶けしドームに手を合わす
浜松東高校一年　大桒 汰羅

〈小学生の部〉

父の日に料理ふるまいぼくはシェフ
和田小学校六年　寺田 光希

流れ星未来の町へとんでゆけ
中郡小学校五年　石川 杷奈

ケンカした三時のスイカはなみだ味
神久呂小学校四年　北嶋 青空

ようふくの重くなるまで水遊び
大瀬小学校四年　古木 花歩

虫とりは姉と弟逆転だ
笠井小学校六年　岡田 菜愛

墓参り何があったか伝えなきゃ
中郡小学校六年　内山 雄太

奨励賞

〈一般の部〉

墓詣り孫へ引き継ぐ遠州弁　浜松市東区　石岡 義久

白桃の滴る予後の掌　東京都江東区　市川 千恵美

人生の余白を探す星月夜　東京都足立区　田中 正博

車椅子の妻の白シャツ空青し　大阪府東大阪市　森 教安

七夕や習ひ始めの鏡文字　磐田市　鈴本 登志子

大海原や鶏頭は天を突く　静岡市　池谷 洋美

やけ食いの高級アイス大カップ　浜松市南区　鈴木 やよい

スコップで挨拶交はす雪の朝　神奈川県横浜市　杉山 太郎

二人して千通の文遠き春　浜松市東区　田村 いつ子

坂道の下すーちゃんのすみれ咲く　愛知県豊橋市　鈴木 麻衣

鱗粉は眠り薬か春惜しむ　長崎県北松浦郡　田中 龍太

よく撓る手首返して水を打つ　神奈川県南足柄市　海野 優

救助犬秋夕焼を戻りけり　浜松市浜北区　鈴木 柚

黙食に秋刀魚と語る米寿かな　北海道札幌市　穂苅 敏

白髯に朝露宿し十湖大人　浜松市中区　伊賀 和子

たれかれに背中はひとつ秋の風　磐田市　松井 禮子

盗塁の砂煙溶く西日かな　埼玉県蕨市　臼田 康一郎

雪解水駆けてとどまるところなし　神奈川県川崎市　下村 修

調律の音一つづつ秋深む　神奈川県川崎市　久保田 聡

草を刈る登校前の牛の餌　群馬県藤岡市　小柏 久男

〈高校生の部〉

お正月「大きくなったな」笑う祖父　浜北西高校二年　桑原 杏実

悩む初夏数年後には思い出に　浜松東高校三年　屋代 享那

母親の足跡を追う雪の道　浜松東高校一年　渡瀬 はる香

迎え火の薫りにつられ靴をはく　天竜高校春野校舎二年　曽根 詩和

四十日人生最後の夏休み　浜北西高校三年　山下 紗菜

凍える日射位に入れば関係ない　浜北西高校二年　齋藤 愛彩

妹と家で書初床汚す　浜松東高校一年　髙津 楓

自転車で学校帰りの墓参　浜松東高校一年　鈴木 颯斗

油絵の匂いただよう秋の暮　浜北西高校二年　木村 光里

銀杏に嫌な顔して笑う君　浜北西高校二年　東本 蒼依

幸せになりたいもんで初詣　浜北西高校二年　竹内 一喜

オリオンを眺める私は六等星　浜松東高校一年　伊藤 凛咲

カメラには君の姿とかき氷　浜北西高校一年　長坂 音々

妹の作るそうめん夏休み　浜松修学舎高校二年　松島 颯汰

おはじきをひろげたような冬の星　浜松市立高校一年　田端 愛歌

なりたての友達と見る初桜　浜北西高校一年　馬塚 瑠衣

剣道場若武者達に光る汗　浜北西高校二年　吉田 心之助

自分の殻とじこもったまま新学期　浜北西高校一年　竹内 絢音

青一色ぽつんと一つ浮かぶ凧　浜松東高校一年　小森 海璃

色無き風トランペットで彩どりを　浜松修学舎高校二年　尾嵜 楓

白髯（しろひげ）　秋刀魚（さんま）　撓る（しなる）　鶏頭（けいとう）

銀杏（ぎんなん）

奨励賞

〈中学生の部〉

一周忌横目でふと見た彼岸花
西遠女子学園中学校三年　鈴木 智織

大雨に命の重さ思う夏
加藤学園暁秀中学校二年　塚本 大貴

夏休み鮮やかな爪今日限り
西遠女子学園中学校二年　三土手 日向花

放課後の静けさの中絵の具とく
東陽中学校一年　安間 結

冬の風自分自身で越える壁
与進中学校三年　柳澤 優衣

トロンボーン聞きに来たのか青蛙
佐鳴台中学校三年　山岡 ゆめ

麦茶飲みビールのCMまねてみる
西部中学校三年　佐藤 由菜

梅雨明けてタコを狙って船の上
佐鳴台中学校三年　伊藤 奨麻

靴汚し向日葵畑でもういいよ
笠井中学校一年　田中 四季

友達の声が聞こえぬ滝の悲鳴
与進中学校一年　森田 陸空

ふと見ると泳ぎたくなる青い空
西遠女子学園中学校一年　髙柳 佳奈

ろうそくに百物語火を灯す
天竜中学校一年　清水 柚花

夏休みどこか遠くに出かけたい
笠井中学校二年　岩堀 栞

水浴びて心と体洗われる
笠井中学校三年　鈴木 智也

かき氷くずれぬように攻めていく
笠井中学校三年　望月 彩羽

落ちこんだ部活帰りの雲の峰
丸塚中学校二年　長谷川 帆風

教室で一人ぼっちだ花吹雪
天竜中学校一年　宮島 きく

向日葵を思い出させる君の顔
与進中学校一年　末長 愛唯那

部長とはもう呼ばれない夏の果
西部中学校三年　相佐 亜希

早朝の蝉のアラーム大音量
西遠女子学園中学校三年　森 優子

〈小学生の部〉

うりの馬まよわず来てねおじいちゃん
北浜南小学校三年　太田 龍

夏祭り母とまちがえ声かける
和田小学校六年　松永 梨菜

はがぬけて大人になった夏休み
与進小学校三年　神谷 忠宏

いつか空今日も夢見る錦鯉
有玉小学校六年　中田 心葉

夏休みあの事この事主婦のよう
中郡小学校五年　大村 宥稀

朝いそぎ鍬形虫に会いに行く
有玉小学校六年　鈴木 丈波

うつせみを拾いさんぽでひまつぶし
大瀬小学校四年　山口 心吾

太陽に照らされる木や夏来たる
蒲小学校六年　髙橋 真由

スイカ玉赤だと思い切ったら黄
与進北小学校五年　菅谷 壮汰

祖母の家浴衣の山でずっこける
中郡小学校五年　磯部 桃羽

妹のはな水光るさむい朝
中瀬小学校二年　大塚 心乃

クリスマス布団に潜り朝を待つ
積志小学校五年　油井 隆之介

おしごとのあせがくさいよおとうさん
県居小学校二年　太田 和

とげとげにさわらないようにきゅうりとる
笠井小学校一年　竹下 和実

夏休み水ぞく館のゆめを見る
与進小学校三年　長谷川 智仁

炎天下心は一つ火のリレー
中ノ町小学校五年　髙橋 瑚々奈

金魚鉢大きな夕日に吸いこまれ
北浜南小学校六年　井上 桃萌（もも）

木のオフィス土日も仕事油蝉
和田東小学校六年　髙塚 朱里

たまむしのせなかがきらきらにじみたい
与進小学校一年　犬塚 元毅

じっとまつ旅出つ時をアゲハちょう
積志小学校五年　鈴木 まり